

一

次の各文の傍線部を漢字に直しなさい。

- ① お金のクメンをつける。
- ② 祖父母のアンピを気づかう。
- ③ 音楽の才能をジフする。
- ④ 前代ミモンの事件が発生した。
- ⑤ 利益はみんなでセツパンした。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ここに一つの誤算がある。

私たちは好恵の悪口を言いふらすことで、彼女の評判をおとしめ、クラスのみんなを味方につけようともくろんでいた。そこには、願わくば好恵を仲間外れにしてやりたいという悪意も潜^{ひそ}んでいただろう。しかし、みんなは私たちの話をきいても、当然ながら私たちほど腹を立てず、それどころかむしろ好恵に同情的だったのだ。誕生会でプレゼントをあげたのに何も食べさせてもらえず追い返された五人より、意地悪なお母さんに誕生会をしてももらえない一人のほうが、第三者の目には遥かに不憫^{ふびん}に映るらしい。私たちがどんなに空腹だったかを訴えても、それは彼らの琴線^{きんせん}をくすぐるに及ばず、彼らの哀れみは涙を浮かべて耐えていた好恵一人に集中した。

しかも、相手は普段、人一倍にぎやかな好恵である。いつもは元気な女の子の意外な側面。それは男子たちの好恵熱をより一層あおりたて、好恵を嫌っていた女子たちの態度をも軟化させた。

私たちのまき散らした中傷は、^②帰するところ好恵から何も奪えず、かえって彼女に欠けていた何かを埋めて終わったのだ。

完敗だった。^③世論に敗れた私たちは、再び好恵を受け入れるしかなかった。クラス中を敵にまわさないためには、誕生会のことは水に流したふりをして、以前と変わらぬ関係が続けるほかはない。

私たちが涙をのんで何事もなかったようにふるまうと、数日間はおとなしくしていた好恵もそれにならい、以前と変わらぬ彼女に戻った。そうして四年三組には以前の均衡^{きんこう}が戻り、「好恵のお母さんは継母^{まはは}」だの「遊び好きで料理もしない鬼母」だのという学級伝説を残して、誕生会の一件は静かに忘れ去られようとしていた。

忘れなかったのは、ごちそうを食べそこなった上、クラスの男子からへ食い意地の張った五人のレッテルを貼^はられた私たちだけである。上っ面の笑顔とは裏腹に、不満を抱えたまま和解を強^しいられた私たちの、胸の暗部に宿った好恵への

憎悪は日増しに募っていった。

私たちは好恵を許さなかった。

そこで、ひそやかな復讐を企てた。

「好恵とは一応、仲良くする。でも、もう私たちのお誕生会には呼ばない。お誕生会の恨みはお誕生会で返すべきだし、それに、休日のパーティーまではクラスメイトの目も届かないから」

最初、春子がこの復讐案を口にしたとき、私はなんとなく A 案だろうとすっかり感心した。誕生会の恨みを誕生会で返すというのは確かに道理にかなっているし、あれだけのことをされたのだからこれくらいはして当然と、私たちは全員一致で好恵を今後の誕生会から閉めだすことを決議した。

自分のうかつさに思い至ったのは、その決議から数日が過ぎてからのことだ。私は ④ 肝心なことを忘れていた。

グループで二番目に十歳を迎えた好恵に続く、三番目の十歳。

好恵に最初に手を下すイヤな役まわり……

そう、私は三週間後に誕生日を控えていたのだ。

七月八日。七夕の翌日にあたる私の誕生日は日曜日だった。

これがいつもの誕生日なら、私は幸福度一二〇パーセントで宙に浮いていたことだろう。

しかし、 ⑤ 私は疲れきっていた。

好恵を誕生会から締めだすことに決めたあの日から三週間、私は人の視線とはこんなにも怖いものかとつくづく思い知らされながら過ごした。いつ、好恵に誕生会のことをきかれるのか。いつ、好恵は自分が誕生会に招かれないことを悟るのか。私は絶えずびくびくと好恵の視線ばかりを気にしていたのだ。

好恵に「おはよう」と声をかけられるだけで、私は招待状の催促でもされたように顔を赤くした。会話の途中で沈黙が訪れるたび、「ところで、紀ちゃんのお誕生会だけど……」と切りだされるのではないかとどきまぎした。毎日が緊張の連続。七月八日が近づくほどにその緊張は高まっていった。

これほど自分が小心者とは知らなかった。復讐がこれほどの苦痛を伴うものと

気がつく、 ⑥ 足が勝手に私を運んでいた。私は階段を駆け下りて玄関をくぐりぬけ、庭先の自転車に飛び乗った。

⑦ 自転車は私を好恵の家へ運んだ。

⑧ 風も、地面も、すべてが私をそこへ運んでいく気がした。

好恵の家はいいかわらず整然と、一寸のゆるみもなしにたたずんでいた。軒先に縦列された二台の自転車の片方は、ついさっき好恵が停めたものにちがいないく、私はその几帳面な停めかたに学校における彼女とのギャップを感じながら、自分の自転車を荒っぽく乗りすてた。それから一つ深呼吸をして玄関へむかった。

熟柿のような電球に照らされたブザーに手を伸ばすのには、勇気がいった。私は好恵と会うのが気まずいだけでなく、あの日、あんなにもはっきりと私たちを拒んだおばさんに会うことも恐れていたからだ。

どうか鬼母が生まれよう。

どきどきしながらブザーを押すと、数秒後に「はい」と低い声が出て、扉が開かれた。

「ひっ」

現れたのは鬼母だった。

「あ……ら」

エプロン姿のおばさんは、濡れた手をそのポケットのあたりでぬぐいながら、私に困惑の目をむけた。夕食時のせいか、扉のむこうからは炒め物のいい匂いが香ってくる。後ずさる私を前に、おばさんはその匂いを辿るようにふりかえり、好恵はどうのとぶつぶつ言いながら奥の部屋へと踵を返した。私のことを憶えていたらしい。

数秒後、重たい足音と共に好恵が現れた。

「どうしたの」

開口一番に問われ、私は C。好恵の声には「なんか用？」とでもいうような、白々とした響きがあったからだ。

「あの……その、プレゼントありがとう」

言葉につまった末、いきなり本題に入ると、

も知らなかった。ついに誕生日を迎えたその日、だから私は誕生会やプレゼントの喜びより、ようやくその苦痛から解放される喜びのほうが大きかったのだ。

誕生会は滞りなく進んで、終わったと思う。

みんなの帰った後、急にがらんとした部屋の中で、私は一気に脱力した。もらったプレゼントをしまうのもおっくうで、その場に散らかしたまま二階へ上がると、部屋のベッドにどてつとつぶした。甘いケーキの味はどうに忘れ、苦い後味ばかりが残っていた。

一生に一度しかない十歳の誕生日。

もう永遠に取り戻せない特別な一日。

好恵はあの日、どんな思いで十代への第一歩を踏みだしたんだろう。

そして今日はどこで何を思い、過ごしていたんだろう。

誕生会の終了と同時に、私はこの胸のもやもやから解放されるはずだった。なのにもやもやは増す一方で、まぶたの裏に焼きついた好恵の視線はなおも私を苦しめる。ついてない、と思った。私の誕生会が七月八日でなかったら、秋や冬の終わりのほうだったら、私は例年通りに何も考えず楽しい一日を過ごしていたはずだ。一年で一番幸せなはずの一日。なのに、好恵の次に生まれたばかりにすべてがだいなしになってしまった。ついてない。ついてない……。

「紀ちゃん」

と、そのとき、ふすまのむこうから姉の声がした。

入るよ、とノックもせずに見えた姉は、ベッドに伏せた私のもとへ B

歩みより、黄色いリボンのかかったたんぽぽ文具店の包みを差し出した。

「今、家の前であんたの友達みたいな子に会ってさ。これ、あんたに渡してって」

「え」

「直接渡せばって言ったら、自転車に乗っていつちゃった」

私は声もなくその包みを受けとった。姉が去ってからリボンをほどくと、包装紙にくるまれていたのは須田さん並みに豪華なサンリオ商品のセットだった。私の好きなリトルツインスターズのメモ帳もある。

「……………」

「え？ ああ、あれか」

自転車にはまだぬくもりが残っているはずなのに、好恵は遠い昔でもふりかえるようにわざわざ首を傾けた。リアクションの達人にしては鈍すぎる反応。 ⑨ 私はますます勢いをそがれて動揺した。すまし顔を明後日の方向へむけている好恵を見ていると、自分がここに何を期待して来たのかわからなくなってくる。

苦しい沈黙の末、ひとまずここは撤退だ、と逃げることにした。じゃ、それだけ、と早口で言いながら背をむけ、ドアノブに手をかける。

「夕ごはん……」

と、そのとき、背中からおばさんの声が出た。

「⑩ 夕ごはん、まだなら食べていきなさい」

最初のうち、私はそれが自分にむけられた言葉とは思えなかった。あのおばさんがこんなことを言うわけがない。しかし、ふりむくとおばさんは怖いくらいにまっすぐに、確かに私を見つめていた。

「……はい」

⑪ どうしてか「いいえ」と言えなかった私は、この夜、おばさんや好恵の後について居間へ通され、眉毛のあまりないカーリーヘアのお姉さんや、「デブ」「クソ」「バカ」など憶えたての汚い言葉を連発する弟と夕食をともにするはめになった。おじさんの姿は見えず、「クソジジイは接待バカゴルフ」と弟がその理由を説明した。

アジフライ。ピーマンとウインナーの炒め物。かぼちゃの煮つけ。ツナサラダ。味噌汁。

テーブルの上はそれなりににぎやかだったけれど、しかし静かな晩餐だった。好恵は学校にいるときの十分の一もしやべらず、お姉さんは終始ぶすつとしていて、弟一人が悪たれをつき続け、それをおばさんがたしなめる。好恵はなにも無限のエネルギーを持っているわけじゃなく、あのサービス精神は学校でのみ発揮されるのだと私は初めて知った。そういう私も緊張で口がこぼれり、「もっと食べて」とうながすおばさんにうなずき返すのがやっとだったけれど。

おばさんは数分おきに「もっと食べて」とくりかえした。ウインナーを独占し

ようとする弟の手をはたいて、小皿に私の分を確保してくれもした。そのくせ、おかずの量を気にしているのか自分はほとんど箸を動かそうとしない。

もしかして……。あいかわらず気難しげな顔をして、それでも必死に私を気遣うおばさん。そしてその様子をじっと見する好恵の横顔をながめているうちに、私はなぜ今、自分がここにいるのかわかったような気がした。

好恵にとって一生に一度の十歳の誕生日。あの日、私たちはここへ来なければよかったと後悔したけれど、好恵も好恵で私たちを呼ばなければよかったと後悔し、おばさんもまた何らかの悔いを抱えてきたのかもしれない。

そう思った瞬間、あまり D の合わない友人宅での居心地の悪い夕食会は、何か大事な意味を秘めた苦行へと変わった。取り返しのつかない何かを取り返そうとするように「もっと食べて」を連発するおばさんは、確かに私のどこかを満たし、そしてきつと、好恵のどこかを癒したのだ。

「ごちそうさまでした。おいしかったです」

夜も更けて皿も空になると、私は疲れた様子のおばさんに礼を言い、「もう来んなよ、クソバカ女」と憎まれ口を E 弟を柱の陰でこづいてから、好恵の家を出た。いいと言うのに、好恵は途中まで送るといつてきた。

もう一日早ければ織姫と彦星も再会できたにちがいない空の下、街灯に照らしだされた数蚊の群れのむこうに 無限の瞬きを望みながら、私たちは無言で家への道を歩いた。私は自転車を押しながら、好恵はその後ろからてくてくと。途中、私が「もういいよ」と何度も好恵をふりかえったのは、黙りこんだきりの彼女をおもんばかったことではなく、自転車に乗って帰ったほうがよほど速いからなのだが、好恵はそのたびに「もうちょっと」と見送りの距離を引き延ばした。

何か言いたげで、なにに言えずにいた好恵がようやくその一言を口にしたのは、そんなやりとりが幾度となく続いた後、「ほんとにもういいから」と私が自転車のサドルにまたがろうとした瞬間だ。

「……つてくれる？」

好恵は私を遮るようにして自転車のハンドルを握りしめ、^③ かすれ声でささやいた。

問1 ②「帰するところ」の意味として、次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

- ア がんばって見たが イ 考えてみると
ウ 大まかにいえば エ 結局のところ

問2 A に適する漢字を一字で答えなさい。

問3 B に入れるものとして、次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

- ア いそいそと イ そそくさと ウ ずかずかと
エ こそこそと オ ぬけぬけと

問4 C に入れるものとして、次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 失望した イ おどろいた ウ 嬉しくなった
エ たじろいだ オ 拍子ぬけした

問5 D に入れるものとして、次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 牛 イ 馬 ウ 犬 エ 猫 オ 猿

問6 E に適する言葉を、ひらがな三字で答えなさい。ただし「はなす」は正解としない。

「え」
「うちのお母さんの料理、おいしかったって、明日、学校でみんなに言ってくれる？」

私たちを包んでいた生温い夜気が、ふいにびしりと肌を打った気がした。私はとっさに目を伏せ、からから回る自転車のペダルを声もなく見下ろし、その回転が止まってからようやく顔を持ちあげた。

好恵は唇を踏んばって私の答えを待っていた。
「うん。言うよ」

それだけ返すのが精一杯だった。

「おばさんの料理、おいしかったって、明日、みんなに言う」

今にも泣きそうなくせに意地でも泣かない好恵の顔が、なんともいえない安堵の表情に変わった。好恵は小さくうなずき、ふうっと息を吐いて、私の自転車から手を放した。それからすばやく回れ右をして、もう用は済んだというふうに掌をふらふらやりながら、廊下で男子を追いまわすときのような軽快な駆け足で、深い夜のむこうへと遠ざかっていった。

(森 絵都「永遠の出口」による)

※1 琴線：物事に感動・共鳴する感情を、琴の糸にたとえていった語。

※2 均衡：複数の物事の間で釣り合いがとれていること。

※3 踵を返す：引き返す。

問7 ①「誤算」とはどういうことか、次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

ア クラスの男子から「食い意地の張った五人」という予想もなかったレッテルを貼られて、悔しい思いをすることになったこと。

イ 自分たちが好恵の誕生会で食事を出してもらえず、いかにひもじかったかがクラスのみんなに理解してもらえなかったこと。

ウ 好恵の悪口を言いふらし、彼女の評判をおとしめようと思ったのに、実際には彼女の人気を上昇させることになったこと。

エ 好恵を仲間外れにしてやろうというもくろみがはずれたために、上っ面の笑顔とは裏腹に、彼女への憎悪が日増しに募っていったこと。

問8 ⑥「足が勝手に私を運んでいた」、⑦「自転車は私を好恵の家へ運んだ」、⑧「風も、地面も、すべてが私をそこへ運んでいく」という表現からどのようなことが感じられるか、次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

ア 好恵を誕生日に招待しなかったことを、「私」がすまないと感じていたということ。

イ 「私」が無意識のうちに、好恵の家に向かっていているということ。
ウ プレゼントを持ってきたのは好恵しかありえないと強く思っているということ。

エ 「私」が、サンリオ商品のセットをくれたのが好恵なのか、半信半疑だということ。

オ プレゼントを直接渡してくれればよかったのにと、好恵を責めていること。

問9 — ⑩「夕ごはん、まだなら食べていきなさい」とおばさんが言った時の気持ちとして、次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

ア 食べていくかどうかかわからないが、娘の友達だから一応声をかけてあげようというぐらいの気持ち。

イ わざわざプレゼントのお礼を言いに来てくれたのだから、ぜひごちそうしなくてはならないという気持ち。

ウ 以前、娘やその友達にした仕打ちの罪ほろぼしのためにも、ぜひ食べていつてほしいという気持ち。

エ 本当は迷惑だが、以前の誕生会でも食事を出さなかったので、今回は仕方がないと我慢する気持ち。

問10 — ⑪「どうしてか『いいえ』と言えなかった」とあるが、「私」が招待された「夕ごはん」に、あまり気乗りしないのがわかる言葉づかいを、同じ形式段落の中から一語で抜き出して答えなさい。

問11 — ⑫「無限の瞬き」とは何か、五字以内で答えなさい。

問12 — ⑬「私はますます勢いをそがれて動揺した」、⑭「かすれ声でささやいた」の表現から感じられる気持ちとして、次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

ア 迷い イ 反感 ウ 失望 エ 怒り
オ 不安 カ 憎しみ キ あせり ク 恥ずかしさ

問13 — ⑮「世論」とあるが、ここでの意味はどういうものか、十字程度で答えなさい。

三 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい。

割り箸が森林を破壊していると批判されたり、割り箸追放運動が起きていると聞くと、まるで割り箸は、日本人、いや中国人にも嫌われているかのようである。

A、現実には莫大な量の割り箸が使用されている。戦後一貫して割り箸の需要は増えてきた。それも飛躍的だ。それだけ日本人は割り箸を好んできた、そして今も好んでいるのは間違いない。

それどころか割り箸の需要は、世界中で確実に増えている。その証拠に、中国で生産された割り箸は、今や中国国内でも使われているし、日本以外にも輸出されているのだ。これまで割り箸なんて知らなかった人が、あるいは箸そのものを使わなかった人も、次々と割り箸を手に取り、使い始めている証拠だろう。

割り箸追放運動やマイ箸運動などを展開している人に聞いても、割り箸そのものが嫌いというより、それが森林破壊につながるとか、ものを大切にする象徴という思いで活動しているようだ。割り箸の利便さ、使い心地の良さは認めている人が多い。

割り箸は、なぜ好まれるのだろうか。この点を考えておこう。さもないと割り箸問題を考える際の原点を見失ってしまう。

まず考えられるのは、B「清潔」であることだろう。箸を使えば先に食物の滓がつく。人の唾液もつく。ちゃんと洗わないと、箸先に残るかもしれない。同じ人物が繰り返し使う自宅ならともかく、不特定多数の客が使う外食の現場では、これが問題となる。とくに発展途上国では、肝炎やエイズ、最近では中国を苦しめた新型肺炎・重症急性呼吸器症候群(SARS)などのため、衛生観念の普及は焦眉の急とされている。

しかし、塗り箸の洗浄と消毒には、多大の手間とコスト、それに現在なら環境負荷もかかることが指摘される。なかには、不十分なものが、再び食卓に上がることを覚悟しなければならない。事実、町の食堂を介した肝炎の流行などが伝えられたこともある。

飲食店では、この洗浄作業が大きな負担となる。自分の食べた分の箸だけ、家

問14 — ⑯「肝心なこと」とはどのようなことか、次の空欄に適する語句を抜き出して答えなさい。(完全解答)

A のが、 B だということ。

問15 — ⑰「私は疲れきっていた」とあるが、それはなぜか。次の空欄に適する語句を、それぞれ五字で抜き出して答えなさい。(完全解答)

この三週間、 A が気になって、 B だったから。

族の分だけなら、さして手間にはならないが、外食の店では、一日に数百膳から数千膳にもなる。それらを洗うには店員の労働を何時間か費やすことになり、水も洗剤も大量に使用する。そのコストは馬鹿にならない。その点、割り箸は使い終わったものは捨てるだけだ。ゴミの量が増えるという問題はあるが、手間の点では比べ物にならない。

日本では、一九六〇年の東京オリンピックを前に政府が飲食店における割り箸の使用を励行したという。外食が増えることを見込み、衛生面の改善を求めたのだ。このオリンピックと割り箸の関係は、現在も続いている。韓国に割り箸が一気に普及するのは、ソウルオリンピックを控えた時期であるし、二〇〇八年に北京オリンピックを控えた中国でも、割り箸の普及が著しい。

だが日本で割り箸が生まれ、広く使われる理由は、それだけではないように思う。そこで考えられるのが、食べる直前に自分で割る、それ以前には誰も使っていないという「清浄性」が受けたことだ。そして、使い捨てゆえに非日常の気分が味わえる要因もある。日常生活ではないハレ(古くは祭などの神事)の食事では、一度きりの箸を使うのが日本の伝統なのだ。割り箸は、そんなハレの日の食事を連想させる。

その点について考察する前に触れておきたいのが、ヤナギの白木箸だ。

ハレの日の箸は、白木箸だった。現在でも正月や冠婚葬祭には、中太両細の白木箸が使われる。ヤナギといっても、実際の素材はミズキだという。箸の両側で食べられるが、片方は神が口を付けるといふ意味がある。またヤナギは邪気と不浄を払う霊木でもあった。余談だが、ヤナギを研究したところ、材の成分からサリチル酸、つまりアスピリンの原料が発見されている。これがヤナギの霊性の正体かもしれない。

ハレの箸である白木箸は、使用後捨てることから、1である。正月の箸も、正月飾りなどを燃やすとんどにくべる風習をもつ地域は多い。ハレの箸は期間が過ぎたら破棄されるのだ。ここに割り箸の使い捨ての原型があるように思う。

C 茶の湯を興隆させた千利休は、茶会の懐石に使う箸として吉野から赤杉を取り寄せ、自ら削って面取りも行い中平両細の箸を作り出した。使う人

を思い、手に馴染む形にする。これが大層な人気を呼んだ。そして、この箸も使用後、処分されたのである。

もともと日本には「穢れ」の思想があるが、人が手をつけていない無垢の素材に対するこだわりがあるのだ。それは「素材の味を大切にする」という日本料理の原点からも探れるし、伊勢神宮の神殿を二〇年ごとに建て替える慣わしともつながる。建築において、集成材や合板、ボードなど人工的な木材を嫌う心象にも無垢を尊ぶ心性が感じられる。

礼儀作法でも、塗り箸よりも割り箸の方が格が上だ。供する箸が、それ以前に使った人がいないことを示すことは、より客人をもてなすことになる。このようにハレの食具であったことが、割り箸の普及にも一役買っているのではないか。清潔と清浄性というキーワードに重なるが、美観も無視できないように思う。スギやヒノキなど針葉樹材の割り箸なら年輪が美しい。そして木の香が食事の席に好まれた。

塗り箸は、3 使えば痛んで見た目が4 なる。塗りが剥げてくるものもある。食べ物に口運ぶ道具として、そうした汚れは決して心地よいものではない。自分専用の箸なら気にしなくても、飲食店の場合はそのまいかない。もし箸が傷だらけで汚れていたり、塗りが剥げていた場合、それを口に運ぶのが5 なりかねないからだ。客はその店の食事を美味しく感じられずに、次から来なくなるかもしれない。飲食店の経営からするとマイナスとなるだろう。そして、割り箸の使い心地の良さも忘れるべきではない。これは個人の好みや感性が関わってくるが、割り箸が素の木材であることは案外重要と思う。まず生の木肌に手や指が触れる。木肌は冷たくなく、温かくなく、心地よい感触だ。森林総合研究所の宮崎良文氏の研究によると、木肌に触ると脳波にアルファ波が現れリラックスするという研究結果が出ている。ならば割り箸で食事することとは、知らず知らずにリラックスしていることになるかもしれない。それに塗り箸のように水分をはじかないから、べとつきにくい点もプラスだろう。また割り箸は軽いうえに、柔らかくしなる木材が使われることから、手首の負担が減ることも考えられる。塗り箸の材料には硬質の木材が使われるこ

問1 A D に入れるものとして、次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

- ア ところで イ さらに ウ しかし
エ やはり オ むしろ カ なるほど

問2 — ①「需要」の反対語を漢字で答えなさい。

問3 1 に入れるものとして、次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 原則 イ 例外 ウ 日常 エ 規則

問4 3 5 に入れるものとして、次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 短く イ 長く ウ 恐ろしく
エ 悪く オ うまく カ 疎ましく

問5 — ②「ものを大切にする象徴」とあるが、何が「ものを大切にする象徴」だというのか、本文中から抜き出ささい。

問6 — ③「使い心地の良さ」とあるが、このことについての説明はどの段落から始まるか、その段落の初めの五字を答えなさい。

問7 — ④「不十分」とあるが、何が不十分なのか、本文中から十字以内で抜き出ささい。

とと^⑧ タイシヨウ的である。加えて口に運び唇や舌に触れた際の感触が優れている。歯当たりもよいし、もしかんでしまっても歯に響かない。もちろん塗料がはげて口に残る心配もない。

D 食べる前に割り箸を割る、という行為はけじめがつく、という意見もある。仏教的な考え方だろうが、生きるために他の生物の生命を食べる食事を、生活の中で神聖な儀式に仕立てるけじめになるというのだ。そこに割り箸を割るという行為が、日本人の心性にあったのかもしれない。

(田中 淳夫「割り箸はもったいない?—食卓からみた森林問題」による)

- ※1 焦眉の急…さしせまった急務。
※2 励行…決めたことを守って実行すること。
※3 ハレ…晴れがましく正式であること。
※4 とんど…正月十五日に、門松・竹・しめなわなどを燃やす行事。
※5 興隆…勢いが盛んになること。
※6 懷石…茶の湯の席で、茶をすすめる前に出す簡単な食事。
※7 無垢…けがれないこと。
※8 素…他のものが加わらず、そのものであること。

問8 — ⑥「それ」とは何を指すか、本文中から抜き出ささい。

問9 — ⑧を漢字に直ささい。

問10 — ⑤「オリンピックと割り箸の関係」とあるが、それはどのようなことか、三十字以内で説明しなさい。

問11 — ⑦『「清浄性」が受けた」とあるが、これは日本人の考え方にどのような特徴があるからか、これより後の本文中から十字以内で抜き出ささい。

問12 2 に入れるものとして、次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 最近日本でも欧米にならって、これらの人工的な木材を使う割合がどんどん増えてきているのも、もったもなことである。
イ 欧米では、これらの人工木材が木材利用の八割を占めるのに対し、日本では二割ほどに留まっているのもそのためだろう。
ウ 合板などの人工木材を、積極的に活用しようとする世界的な傾向に、日本も従わざるをえないということなのかもしれない。
エ 日本での住宅建築において、集成材や合板の使用される割合が、欧米に比べて極めて高いのもそのためであろう。